

## 随想・紀行

### スリムブリッジ行

松井 繁

#### はじめに

昨年末の25日から正月4日まで、スリムブリッジを見たくて、生れて初めて外国旅行を試みました。付添兼通訳?の長女を連れて英国へ行ってきました。山階鳥類研究所の山階さんから、IWRBの日本支部の設立の話をしてくるようにとのお話があり、その仕事もしてきました。詳しくは総会でお話をするつもりでしたが、本田事務局長から会誌にその原稿をと言われましたので、一応、報告らしい報告ではありませんが書いてみました。

12月26日、午後9時に羽田を出発。飛行機に乗ってからの静けさは何ということであろう。喰べること、眠ることの繰り返えしである。昨日までの忙しさは嘘みたいである。アンカレッジで給油のため1時間休憩、午前9時に出発、マッキンレーの素晴らしい山なみを眺めているうちに間もなく夜になる。北極の空にオーロラが見える。飛行機から見ているせいだろうか、想像していたような早い動きではない。比較するものがないけれども、相当の大きさのようであった。

12月27日、午前7時にハンブルグ空港に到着(羽田をでてから20時間近くたっているのに時差の関係でこの時間である)。午前9時フランクフルト着。雪がないのが不思議である。やっと朝がきた、という感じになる。ここで私たちのグループがパリー行きと、ロンドン行きに別かれる。パリー行きの出発が迫っているというので、出迎いの旅行社の社員はそちらの方にとられ、われわれの方は、ゲートの番号、方向を教えられただけ。誰かが英語が分かるだろうと、他人の力をたより

にして、ゲートには着いた。ゲートの職員が何とかかんとか言うのだが、誰もさっぱり分からない。かろうじて娘の通訳で、2名足りない、ということが判明したが、同行者が総勢何人であるかは誰も知らない。結局、羽田で乗らなかったのだろう。ということになって、やっとカンタス航空のジャンボ機に乗りこんだ。午後12時、目指すロンドンのヒースロー空港に到着。雪があると思ってきたロンドンに雪がない。聞けば、クリスマスに雪があるのは稀で、雪のあるなしが、トトカルチョの対照になるそうである。北海道より高度であるから寒さも相当、と考えていたのであるが、左程でない。1月の平均気温が5°-6°とあれば、札幌とはくらべものにならない。メキシコ暖流が流れているためだそうである。けれど午前は10時にならないと明るくならない。

12月28日、29日、私の仕事、娘の買物のお供で過ごす。

12月30日、理事の阿部学さんが国際電話で、前もって、マシューズ教授に約束してくれていた日、いよいよスリムブリッジ行きの日である。生憎と朝から雨、午前7時半、案内兼通訳をしてくれる札幌のH銀行のロンドン支店のS氏が迎えにきてくれる。パーデントン駅、午前8時5分発の列車に乗る。切符も切らず、発車のベルもならず、案内のアナウンスもなく、静かに発車した。午前10時過ぎにストラウドの駅に着く。公衆電話で教授に電話をかけ、秘書が迎えにきてくれる。雨の中を約30分走り、待望のスリムブリッジに着く。昼食をご馳走になりながら、IWRBの日本

支部設立の件を話した。調査、研究に協力してくれるのなら、OK、とのこと、次いで会費、これは政府が加盟するのでなく、民間団体であるので半分にしていただけないか、とお願いしたら20万円でもよろしい、との返事でほっとした。次いで白鳥の国際会議のことについて、二・三話をし、アドバイスを受けた。

サー、スコットをテレビ局が取材中である、とのことで、先に教授が施設の案内をして下さった。展示室、研究室は充実し、整っている。素晴らしいの一語に尽きる。敷地が広いのには感嘆した。更に背景になっている広大な河までの土地は、河川敷なので購入しなくてもよい、ということでも地の利を得たものとすっかり感心した。ガン、白鳥などの観察用の塔は立派なものである。給餌をしている人工池のそばの大きいガラス窓付きの観察室も素晴らしい。けれども日本の白鳥の渡来地に馴れている私には、ふれ合いがないようで物足りない。夕刻、サー、スコットに彼の観察室で会った時に、急に移動したら白鳥が驚くから静かに、との注意があった。差し上げた私の写真集のアップの写真を見て、これはどの位の距離から撮影したのか、という質問があり、すぐ目の前で手の届く程の所で、と答えると、信じられないというような表情で顔を振られた。

サー、スコットは令嬢と嘴峰のスケッチによる個体識別を行っている。三上副会長のコハクの観察によると、本邦では、嘴の裏がわは全部黒の個体が多い旨を話をしたところ、大変興味を示し、またこれに関連してビュウィック (Bewick)、ヤンコフスキ (Yankofski) に違いがあるだろうか、などと話をしたが、彼らの見解は同じであろうとのことであった。

この後、教授がガンの研究室などを案内してくれたが、専門家でない私にはよく分からない。近い将来、横田先生たちが訪れるだろう、と話をすると、それはいつ頃なのか、と期待されていた。

午後6時、教授に車でストラウドまで送って頂き、再会を約して別れた。

12月31日。ホテルの主食堂は新年を迎えるためのパーティの為に閉鎖されており、夕食は同じホテル内の日本食堂へ行く。ここでは珍らしく年越そばがある。最近では既にこの習慣のない所もあるのに、英国で喰べられるとは、とボーイに言うと、味は良いでしょう、となかなか御自慢である。

1月1日 朝、ロンドンを発ち、パリーのドゴール空港へ、フランスではホテル以外は英語が通じないため、タクシーの運転手にホテル名、住所を書いたメモを渡し、2日前にパリーにきている旅行団のいるホテルへ連れていってもらおう。

1月2日 ベルサイユ宮殿を見学する。人と人とはさまれて、押し出されてきた。日本人は相当の数である。はぐれないように、赤いマントの娘さんについて行けば、などと思って歩いていたが、赤いマントではあるが、いつの間にか別人であった。

1月3日 パリー発

1月4日 羽田着、飛行機が着地した瞬間、多くの人たちから期せずして拍手、歓声が挙がる。私も全く同感。パスポートの必要がなくなる、落とす心配をしなくてもよい。話の通ずる母国へ帰ってきた。ということである。

おわりに

私はスリムブリッジについて感じたことの百分の一も書けない。もう一度、今年暮に行きたい、と考えている。「百聞は一見にしかず、である。旅行社に計画を立ててもらっています。総会の折に相談します。皆さん御一緒しませんか。